



授業紹介

(本日 11月、中庭) 走児ち取れ



明大金英年、田島敏純一成績、著記局



44 寶島入 126名にのぼる学長の本講義を一つの契機として、ビバリスト突入以来、日曜
毎月にわたら我らの燃熱を身にが、大学の革新的制度のとりや、大學女芸に対する政策反
対斗争としてではなく、明確に「自己の存在意義の不滿の發露的暴露を媒介とした大學
の帝國主義的專横に反抗するものとして廣く認識されてい。だが故に、あるいはまた、資本主義
社会の發展に伴つてますます本質化せしむる、大學の本質的矛盾、教育研究と社會的
實踐との一面的結合。† 大學の自治上の幻想性と大學共團體の階級性、學問の自由を守
れしの被異化・嘲弄・研究・研究の政策則と支配、科學的修飾的、技術的偏重による本質化を
人とする我々の斗争が、當局・教授会の特権あるいはさきやが在個別利害の決定的に対
立するものであつたが故に、この階段、但別制御を避けて、帝國主義者の政治的意識が實質化
されたいことを、我々は知つてゐる。それでいて彼等は、自効達のことを實害者とも思つ
てゐる。† 当局は國家極力の暴力をもつてゐ、我々の斗争を壓殺する方法を講じない、
然し隊へロックアウト、校門制御下での授業封鎖、監視化し路線として登場して来た時
大斗争の現局面は、そういう大惑せ、まさに大學立派な學府的道徳以外の何ものでもない。
ある教授は、いわじりもなく我々に語り聞かせてもおられる。「大學當局は居直っているんだ。
我々は居直っているんだ。君達の最も大切なことは、日本民族の為めに、日本民族のこの學
校のまことに進むためには奮闘しなさい」また、「確乎と、校門制御下での授業封鎖は、
大學立派の實質的道徳としてあるだう」。さて、少傳の政局も大學の政局が、まだま一致し
たがらといって、何を悪いことではない、はたまた「このままでは明治大學はつぶれてしま
つ。君達は伝統ある明治大學をつぶしちゃうのかよ。ハーン子にも居直る、大學のこの學
生は、ついで教員が、自殺マラクスーストアジス、トルエリタニタニタニタニタニタニタニタニ
華と同類の死ぬべきやうである。然後、大陸へ入域、厭戦論の煽唱があつた。するゝては
なく、我々の更なる帝國主義的をもつて、假らを冠層にまでに煽捧しようとはない」/
革命の一途徑度の終焉局所では、常に在裏叛造の、但別制御などがりつて登場する
ものであるが、それに乗つかりて、我々の斗争を殺せんとするアクト破り事例、自殺、民衆
との衝突した斗争を準備せよ。)

だがしかし、学生諸君、我々はけつまじいこの事実を報えておひなければならぬだろ。つ
まちあち、輪業再開、正常化し路線とは、革新的は、機関への復帰をしてつけなく、明確に
新たなる帝國主義的再編として登場してきて、いわゆることである。資本主義的階級的斗争大
戦の燃熱を身ににかかげず、依然其は、帝國主義者の「更なる解説も解説も利用する
範囲を失つた」。津浦とは、日本の經濟本位のことは、どの方面で抗争の発展の一の形成を
意味しベーチーにとつて、日本の資本的力構造との軍事体制の内部を知用し、それをの
中に對応めることを意味している。(したがつて、半経済半政治的成功とは、日本帝國主
義のあいだに一時的を拂が成立したことであつた。されにしても、日本の經濟本位新
しい路線の出発を意味する。今日、日本の國家統治は資本が豊富にして、さきほど困難
なたえは、全面的な財政正常化、物價騰貴、農業問題や、官僚が不足などの財政難へ政治的
には、統一的道徳、民主主義やオオロギ、支配政策は議会制へ破綻、財本的斗争を解決し
ようとするに当つての、財本資本がもつた貿易本位式、その解決の路筋)

な。いまは本の體と資本が直面している現状の問題は、この銀行性をどのように見掲する
のかといふことである。過剰貨幣化を志願するには、該率の原則にしたがつて重くつく。

以降は過度に、すなはち、資本が生ずる結果、余徳充電へこだまでより多く貢献したのである。そのためには、かれらが何年か用ひつづけでいた方法——帝国主義的採取のため進出することが最も確実なものである。しかも、大量の探査と勘探によって實現するためには、従来の旧植民地主義へ相対資本による帝国主義的探査から新植民地主義へ転化させなければならぬ一つの危機発生時に對して準備的大量分立済援助との化を併存する形で、その他の開拓団の政府を支配して危機発生時の臣民全体を獲取する新植民地主義の方式に立ち直りを要する。そして日本帝國主義者は、その「史跡全跡」を帝のウエスト・アフリカにおける歴史的大きな危機として、東南アジアへと表めてい。ただし、まだ未だ未だ同赴かれてはいる。それ故、アメリカ帝國主義のアジアへ向けて新しい軍事体制即ち經濟体制の建設はあたって日本が独立資本即ちの程度まで、建設の組織者の役割を演することでさうがことである。新植民地主義への轉換が実現する所には、日本の独立資本は建設の組織者とならないければならない。そうであり本ら、新植民地主義の名に徳意する飛躍的剝奪価値を生むことができるし、過度に統治する所をもたらす。即ち經濟资本主義の体的危機の中で激烈な国际競争に打ち戻していくことはできないであらう。一方それによ伴う国内の無止まりの内戦が着々と進行している。中継の日本及華南、東南、東北化自征隊の帝國主義軍隊化へ近づく事、露岳が東京の政正、自紅旗の紹興、長、微兵制の行動隊の増強、自衛空軍の登場、船團の開拓、軍械輸入に対する軍備休耕の進化へ本筋的には行政執行機構の肥大化→帝國主義的監視支配の実現化)そして相次ぐ大規模保険(ハラゲー、富士等)、大型合理化攻撃(日赤、全通等)と並び現われて來ている。その一環としての大学の帝國主義的再編へ大学の専門化、教育の標準化、標準化して義務的表現としてのリカルド研究室国新学園開設。さらには教員の大半を馬鹿頭と大學生頭から貴族→大学立去→官憲→トロバの性質化→新大学内立元決原の再編→大学立去に續く圧迫立派の実現上、左派学生の根絶。この異常的条件一矢不この後伊制下の後業再開に他ならない。それで、安保、津浦平子、そして翌年開牛弟の一環としての昭大斗争も、内立去にしてオーバーキャップをもつて、このセイセイの問題を單純化一政策は、内立去の。それが復元され、既得権利を守るために、内立去の問題を解消する方針を路線と號令の対決でなければなりない。内立去の問題を解消する方針を路線と號令の問題の路線の下に、内立去の対決をしてきた。日本公使の一易委嘱は、この建設をますます緊急を要するものとしている。特く、而して教会のあらゆる分野における斗争も、現在この路線建設のための一環として立去の存在方で想定されるはならない。そこへ於いて、全国の省立・全国公使の対決は、決定的に重要である。しかしながら、そのために従来の標準自然条件、自然成長的斗争であつてはならぬ。アルノン・アシルの隕石は、我々の二度も充実進んでくる。玉子のアーノン・アシルの隕石は、現実にこの路線建設のための二種の立去の存在方で想定されるはならない。そこへ於いて、全国の省立・全国公使の対決は、決定的に重要である。しかしながら、そのために従来の標準自然条件、自然成長的斗争であつてはならぬ。その間、全公使は不死鳥の如く飛ぶのである。全国公使の二度も充実進んでくる。玉子のアーノン・アシルの隕石は、現実にこの路線建設のための二種の立去の存在方で想定されるはならない。そこへ於いて、全国の省立・全国公使の対決は、決定的に重要である。しかしながら、そのために従来の標準自然条件、自然成長的斗争であつてはならぬ。その間、全公使は不死鳥の如く飛ぶのである。全国公使の二度も

スケジュール

四号館統決起集会(平日10時中庭)
統括集会(午時、中大代々木寮)